

均如の法華經觀

金 天 鶴

知儼(602-668)が『法華經』の教説を華嚴学に導入したことは、華嚴学史上の革命と評価できるほど重要である¹⁾。だが、教判体系の中での『法華經』の位置づけは華嚴家によって異なる。知儼は同教一乗の『法華經』を別教一乗の『華嚴經』と価値的に同等とみなしたと評価される²⁾。一方、彼の弟子である法蔵(645-712)は『法華經』を『華嚴經』より一段階下の同教一乗とし、さらに同教一乗に対しては三乗化を追求したと評価されている³⁾。以後、華嚴諸師の『法華經』に対する解釈は時代や地域によって少しずつ異なる。

高麗初期の均如(923-973)は、『法華經』に対する従来の多様な解釈の影響を受けながら独自の法華經觀を形成する。本稿では、均如の法華經認識が端的に頭われる『五教章』第二「教義摂益」に対する註釈を通じ、彼の独特な法華經觀を論ずる。

法蔵は『五教章』第二「教義摂益」の中で、別教と三乗、そして同数の「教」・「義」を『法華經』の大白牛車と臨門三車の譬喩を用いて説明する。次いで、それぞれの「教」・「義」を「三乗の三句」と「一乗の三句」とにより開合する⁴⁾。

均如はこの箇所を注釈して、『法華經』が多義を有するとし、別教と同教については智儼の「融會章」に基づいて説明する。よって、別教は「界外に別に大白牛車を索む」、同教は「三を会して一に帰す」と説明される。この中、均如の独特な法華經觀は同教に関する註釈から見られる。それは続く「三乗の三句」と「一乗の三句」を註釈する箇所である。

均如は總の立場では同教が三句を持つと理解する。すなわち、三乗の三句での同教は「教」だけを表すため「臨門の三車に於いて開方便門と為る」のが一句、一乗の三句での同教は「義」だけを表すため「界外に於いて別に授くる大白牛の車を真実と為すの義に当たる」のが一句、そして「此の教と義とを具す」のが一句と解釈する。

このように三句各々の同教はそれぞれの立場によるものである。その中、別教

と三乗、そして同教を相対的な観点から見ると、三乗は「教」だけ、別教は「義」だけであるが、同教は「教」・「義」・「教義」を具すという。

均如はここでの同教は一三合とは異なると述べる。この一三合とは、三乗自宗と一乗自宗とを単に結びつけたもので同教ではなく、結局、下四教と別教を単純に結合したものである。しかし彼は、同教の「教義」はただ形が一三合と似ているだけで、実際には廻三帰一の所流同教であるという⁵¹。

ここで、この所流同教という概念に注目する必要がある。筆者は彼の法華經觀を特に機根論的な観点から考察する際、同教としての『法華經』の性格がよく見られ、そこには澄觀の影響も考えられるが、主に新羅華嚴の伝統を継承したと把握した⁵²。

その内容を要約すれば次のようになる。均如の『法華經』の教判的説明は、「約時事の教判」と「約義の教判」に二分される。「時事の教判」では『法華經』は「熟頓」に当てられ、内容的には主として終教となる。一方、「義の教判」では、『法華經』が a「下四教以上の同教」と b「華嚴と無二の關係としての別教」に当てられる。この中、aでの『法華經』は、『五教章』第7「決択前後」の10類衆生の中、第7類に当たる。この第7類は、均如の教判体系の中では、法華同教の機根であり、下四教としての同教とは異なる所流同教である。これは「第七の正所流」、「所流法華」とも説かれ、四教以上の同教を意味する。このように、所流同教という概念は機根論の上で用いられる用語である。

前に見たようにその機能は廻三帰一であるが、具体的には「摂益」への註釈に見ることができる。

法蔵は『五教章』の中で「摂益」の対象を三つの側面から説明する。それは①「唯だ界内の機を摂す」、②「界外の機を摂す」、③「通じて二機を摂す」である。この中、②と③の中で同教の摂益に触れる。

均如は、②の中、同教の説明である「(a) 先には三乗を以て其れをして出世の益を得せしむ、(b) 後に乃ち方便もて一乗を得るとは、此れ即ち一乗と三乗と合して説くが故に同教の摂に属す、亦た廻三入一の教と名く、此は法華經に説くが如し」『五教章』（大正蔵45、480上中）に対して、(a) は先に三乗である深密が界内の機を導くことであり、(b) はこれら三乗の出世の人を廻して一乗を得させることと註釈する。

次いで③については、「前は三乗の人を廻して一乗を得せしむることを現ずるは、是れ法花の謀なり。此の中、三車を以て界内の諸子を引き三車の処に至るを

現ずるは、亦た法華の謀なり』『教分記圓通鈔』巻2(韓仏全4-272下)と述べる。即ち③での『法華經』は三乗の出世の人を一乗に廻すのみならず、深密の役割であった界内衆生の引導まで担当するという。

続いて、均如は『古辞』の説を義証として『法華經』に関する二つの見解を自分のものにする。『古時』では、a「法華は是れ廻教、華嚴は是れ引教」の見解と、b「法華の中に引と廻との二義を具す、華嚴は唯だ是れ引教」の見解を出す。この中で、法華に関する規定aとbは、それぞれ「摂益」の②と③に対する均如の解釈と一致する。

このように法華の機能は、「引導の役割」、「廻帰の役割」が挙げられるが、法華の最終的な役割は三乗をして一乗へ入らせることなので廻三帰一となる。一方、華嚴については三乗を引き上げる引教だけと解釈する⁷⁾。

以上のように、均如において『法華經』は所流同教と位置づけられ、その機能は引教・廻教と規定され、三乗を一乗に導くことである。このように『法華經』の機能を廻三帰一と把握するのは以前の華嚴師と変わらない。だが均如独自の立場は、教判論的な立場と機根論的な立場からの説明を行うことと、「引教」、「廻教」などの新羅華嚴の中で形成されてきた『法華經』の機能論的な理解を継承することである。(東京大大学院)

-
- 1) 吉津宜英, 「華嚴系の仏教」, (新崎直道・木村清孝編, 『新仏教の興隆—東アジア仏教思想Ⅱ—』, 春秋社, 1997) 85頁.
 - 2) 木村清孝, 「華嚴經と法華經—東アジアにおける研究の伝統を省みて—」『中央学術研究所紀要』23, 1994, 39頁.
 - 3) 吉津宜英, 『華嚴一乗思想の研究』, 大東出版社, 1991, 第3章第3節.
 - 4) 巻1, 大正蔵45, 480上.
 - 5) 『教分記圓通鈔』巻2, 韓仏全4-271下~272中.
 - 6) 拙稿, 「均如の華嚴一乗義—研究—根機論を中心として」第三章三節, 韓国精神文化研究院 韓国学大学院 博士学位論文, 1999.
 - 7) 『教分記圓通鈔』巻2, 韓仏全4-272下~273下.

〈キーワード〉 均如, 法華經, 引教, 廻教, 機根論, 所流同教, 教判

(東京大学大学院研究生, 哲学博士)